

第3章

連結精算表作成が上達への近道 初めて連結決算に携わる 経理担当者の勉強法

【この章のエッセンス】

- 本章では、これから連結決算に携わる経理担当者に向けて、連結決算の勉強法を示す。
- 連結決算業務の全体像を理解する。
- 連結仕訳は意味の理解は後回しにして、まずは形(借方貸方、科目名)を把握する。
- 連結精算表は手を動かして作成してみる(簡単な数値例でよい)。
- 会計基準を読む。

全体像を理解して、 各論は形から

連結決算を勉強し始めたばかり、これから始めるという方は、まずは「連結決算」の全体像をしっかりと頭

に入れてほしい。「連結決算」の全体像とは、各社の個別財務諸表を合算して連結仕訳を行うという一連の流れのことである。再度図表12を確認しておこう。

各社から収集した個別財務諸表は、連結科目体系に組み替えてから合算する必要がある。各社の個別財務諸表の科目体系は統一されていないことも多いため、あらかじめ、連結科目への組替表を作成しておく、これに基づいて組み替えて合算する。その後、「連結決算」で必要となる仕訳を行う。この「連結決算」で必要となる仕訳を分類すると資本連結とそれ以外に分けられる。

連結仕訳については各種参考書等で説明がなされているので、これから連結を学ぶ方は簡単な参考書でもよいので、どのような連結仕訳が必要なのかをまずは学んでほしい。そ

の際、いろいろわかりづらい仕訳や科目などが出てくることもあるが、ひとまず「形から覚える」ということをお勧めしたい。最終的には連結仕訳の意味や理屈を理解できるほうが望ましいが、全体の理解が進まないうちに細かい論点を理解しようとしても、なかなか理解が進まず、細かいことばかりに気を取られて、全体像がみえなくなり、結果、「連結は難しい」「連結は苦手だ」と思ってしまうおそれがある。

たとえば、小説を読んだとき、登場人物の名前など細かいことばかり気にして読み進めてしまった結果、全体のストーリーがまったたくわからなかったという経験はないだろうか。逆に、全体のあらすじを知ったうえで、再度読むと、最初には気がつかなかった細かな内容に気がつくことができる。これと同じで、「連結

決算」の全体像をしっかりと理解していないままに細かい部分(「仕訳」を理解しようとしても、なかなかわからず、逆に、全体がわかってきてから仕訳をみることで、あっさり理解が進むということもある。

よって、初學者の勉強法としては、まずは連結の全体像をしっかりと把握し、連結仕訳は科目と形(借方が何で、貸方が何)から覚えることをお勧めしたい。筆者自身、公認会計士試験のための予備校で初めて連結を学んだのだが、時間もなかった中で、ひとまずすべての連結仕訳を暗記することからはじめた。仕訳を暗記したことで、予備校の模擬試験ではよい点数を取ることができた。その後、何度も繰り返し問題を解いていくことで徐々に仕訳に対する理解が深まっていった。また、予備校の講師となり、人に連結の説明をする機会が増え、それによって、ますます理解を深めることができたという経験がある。

連結精算表を 作ってみる

連結会計システムを利用している会社の連結担当者は、連結仕訳を登